

Newsletter

SOSHOTSUJIN

雙松通訊

- 講演会開催報告
- 学術会議参加報告
- 活動報告



**二松学舎大学東アジア学術総合研究所
日本漢学研究センター**

— 日本漢文資料による日本像構築の国際的研究 —

Nishogakusha University Institute for East Asian Studies
Research Center for Kanbun Studies

—An International Research Project Based on *Kanbun* Sources
to Reconstruct a View of Japanese Culture—

Vol. 32

雙松通迅 Vol.32

講演会開催報告 Report on Lecture Meeting

- 01 日本漢学研究センター主催特別講演会の開催報告
Report on Special Lecture Meeting Hosted by the
Research Center for Kanbun Studies

学術会議参加報告 Report on Academic Conference

- 03 立教政治研究会・二松学舎大学日本漢学研究センター
共同シンポジウムに参加して
On Attending a Symposium Cohosted by Rikkyō Association for the
Study of Politics and the Research Center for Kanbun Studies,
Nishōgakusha University

- 05 日本中国学会第七十七回大会参加記
On Attending the 77th Annual Conference of the
Sinological Society of Japan

活動報告 Report on Activities

- 07 2025年度寄贈資料三題
Three Materials Donated in Fiscal 2025
- 09 漢籍整理実習講座への参加報告
Report on Attending a Practical Course on Organizing Chinese Books
- 11 鹿沼まるごと博物館第10回企画展関連講座実施報告
Report on Lecture Course Held in Conjunction with the 10th
Thematic Exhibition at Kanuma Museum
- 13 寄贈資料一覧
List of Donated Materials
- 15 公開講座
Open Lectures and Extension Courses
- 16 諸会議等報告
Report on Business Meeting

〔講演会開催報告〕 Report on Lecture Meeting

日本漢学研究センター主催特別講演会の開催報告

Report on Special Lecture Meeting Hosted by the Research Center for Kanbun Studies

日本漢学研究センター長・二松学舎大学文学部教授

Director of Research Center for Kanbun Studies & Professor in
Faculty of Literature

町 泉寿郎
Machi Senjurō

2026年2月7日(13:00～15:30)、本学九段1号館201教室を会場として、標記の講演会を開催した。司会進行は牧角悦子陽明学研究センター長が務められた。

今年2026年は山田方谷150年祭を記念する行事が岡山各地で営まれることになっており、高梁市と本学が協力して展示や講演を行う計画もあるが、それに先立って、今回、高梁市から上村和史氏をお招きして講演会を催すこととなった。

上村氏は、岡山大学大学院で日本近世史を修められた後、本学ともゆかりの深い高梁市において教育委員会の社会教育課・高梁市歴史美術館の主任を務めておられる。上村氏の講演「山田方谷と幕末維新期の備中松山藩政」は、山田方谷と備中松山藩政に関する先行研究を踏まえつつ、山田方谷とその門人、および備中松山藩の財政改革について紹介し、藩財政を潤したとされる吉岡銅山の正当な評価を下したうえで、山田方谷・藩主板倉勝静・藩財政史の研究の現状と課題を分かりやすく解説した。講演の終わりの方で上村氏が語られた、近世史と近代史のそれぞれの研究分野が明らかにしてきた「近世の成熟」と「近代の発展」をどのようにつなげることができるかが大きな課題であるという言葉には、筆者も幕末明治期の史料に取り組んでいる者の実感として大いに共感した次第である。

続いて、小生が「新収資料からみる三島中洲研究の現状」を講演した。本学東アジア学術総合研究所には近年、小野家資料(中洲の母方)、山田準資料(方谷養孫)、西三島家資料(中洲生家)、神戸家資料(方谷の次世代の財政家)など重要な新資料が収蔵されるようになってきている。また科研費共同研究の成果として一冊(飯塚一幸編『塩田地主野崎家』、京都大学学術出版会、2025年12月)にまとめられた児島・野崎家資料にも多くの三島中洲に関する資料が含まれる。従来知られることのなかった重要資料が相次いで現れていることを踏まえて、新資料を可能な限り取り上げつつ

2026年2月7日(13:00～15:30)、于本校九段1号館201教室举办了上述演讲会。会议主持由阳明学研究中心主任牧角悦子担任。

今年2026年是山田方谷150周年诞辰，岡山各地将举办纪念的活动，高梁市与本校也计划合作开展展览和讲座，在此之前，我们先从高梁市邀请上村和史先生举办讲座。

上村氏在冈山大学研究生院修完日本近世史后，便在与本校渊源颇深的高梁市，担任教育委员会社会教育课及高梁市历史美术馆的主任。上村氏的演讲“山田方谷与幕末维新期的备中松山藩政”在参考山田方谷与备中松山藩政相关先行研究的基础上，介绍了山田方谷及其门人，以及备中松山藩的财政改革，并对据称曾使藩财政充盈的吉岡銅山进行了恰当评价，同时通俗易懂地讲解了山田方谷、藩主板倉勝静、藩財政史的研究现状与课题。演讲接近尾声时，上村氏谈到，如何将近世史与近代史各自的研究领域所揭示的“近世的成熟”与“近代的发展”连接起来，是一个重大课题，笔者作为致力于幕末明治期史料研究者，对此深有同感。

接下来，我做了题为“从新收集的资料看三岛中洲的研究现状”的演讲。近年来，我校东亚学术综合研究所收藏了诸多重要新资料，包括小野家资料(中洲的母亲)、山田准资料(方谷养孙)、西三岛家资料(中洲出生地)、神戸家资料(方谷下一代的财政家)等。此外，作为科研费共同研究的成果，儿島・野崎家资料(飯塚一幸編『塩田地主野崎家』、京都大学学術出版会、2025年12月)也被汇编成册，其中也包含许多关于三岛中洲的资料。鉴于不断有前所未见的重要资料相继问世，我在尽可能引用新资料的同时，介绍了三岛中洲的整体情况。

此外，本次演讲会也是自2004年5月成立以来，一直持续举办的三岛中洲研究会的第160次会议，我们也呼吁了三岛中洲研究会和山田方谷研究会的成员前来参加。本校本科生和普通参会者也十分众多，整体而言这是一次意义非凡的演讲会。

三島中洲の全体像を紹介した。

なお、今回の講演会は、2004年5月の発足以来、継続している三島中洲研究会の第160回としても位置付けて、三島中洲研究会・山田方谷研究会のメンバーにも参加を呼び掛けた。本学の学部学生や一般の参加者も多く、全体として有意義な講演会であったと考えている。



特別講演を行った上村 和史 氏
(岡山県高梁市教育委員会)



講演を行った町 泉寿郎
日本漢学研究センター長 (本学文学部教授)



司会の牧角 悦子
陽明学研究センター長 (本学文学部教授)



記念撮影

〔学術会議参加報告〕 Report on Academic Conference

立教政治研究会・二松学舎大学日本漢学研究センター 共同シンポジウムに参加して

On Attending a Symposium Cohosted by Rikkyō Association for
the Study of Politics and the Research Center for Kanbun Studies,
Nishōgakusha University

日本漢学研究センター研究協力員・二松学舎大学文学部非常勤講師
Collaborating Researcher, Research Center for Kanbun Studies &
Lecturer in Faculty of Literature, Nishōgakusha University

武田 祐樹
Takeda Yūki

令和7年(2025)12月6日、立教大学池袋キャンパスにおいて、松田宏一郎先生(立教大学法学部教授)及び共同主催者である町泉寿郎先生(東アジア学術総合研究所長・本学文学部教授)のもと、立教政治研究会・二松学舎大学日本漢学研究センター共同シンポジウムが開催された。立教政治研究会は、立教大学法学部政治学科教員を中心にした研究会で、同学教員、大学院生、学外の研究者、大学院生も参加している。

本シンポジウムでは、「フランス共和主義と明治漢学との邂逅」をテーマに掲げ、立教大学池袋キャンパス12号館の第3・4会議室で開催された。参加者は約20名、院生を含む3名が報告を行い、人文科学と社会科学の枠を越え、活発な議論が行われたが、シンポジウム開催校の教員・院生諸氏の尽力もあって、恙なく進行した。

本シンポジウムは、立教政治研究会を主催する松田宏一郎先生からの挨拶にはじまり、その後、大塚淳氏(立教大学大学院法学研究科博士課程後期課程)が「中江兆民の「英儒」と「進化」：「進化の理」の源泉としてのアルフレッド・フィエとジャン＝マリ・ギュイヨール」という演題で、中江兆民の論理思考の背景にある漢学的素養について報告した。続いて、本学から参加した武田祐樹(日本漢学研究センター研究協力員・本学文学部非常勤講師)が「川田甕江の欧米へのまなざし：甕江文庫所蔵資料に着目して」という演題で、従来漢学者として知られてきた川田甕江の欧米への関心や理解に着目し、重野成斎との確執について新しい解釈を提示する報告を行った。最後に、本学東アジア学術総合研究所元客員研究員のエディ・デュフルモン先生(ボルドー・モンテーニュ大学准教授、立教大学招聘研究員)による基調報告「フランス系民権家官僚、河津佑之論：『修身原論』とアドルフ・フランク、

2025年12月6日、于立教大学池袋校区、在松田宏一郎教授(立教大学法学部教授)及共同主办方町泉寿郎教授(东亚学术综合研究所所长、本校文学部教授)的主持下、立教政治研究会与二松学舎大学日本汉学研究中心联合举办了专题研讨会。立教政治研究会是以立教大学法学部政治学科教师为中心的研究会，同时也接纳同校教师、研究生以及校外研究者、研究生参加。

本次研讨会以“法国共和主义与明治汉学的邂逅”为主题，在立教大学池袋校区12号楼的第三、四会议室举行。约有20名参会者，其中3名研究生作了报告，研讨会在跨越了人文科学与社会科学的框架进行了热烈讨论，在研讨会主办学校的教师和研究生各位的努力下，研讨会顺利进行。

本次研讨会由立教政治研究会主办，以松田宏一郎老师的致辞拉开序幕。随后，大塚淳老师(立教大学研究生院法学研究科博士研究生)以“中江兆民的‘英儒’与‘进化’：作为‘进化之理’的源泉的阿尔弗雷德·朱尔·埃米尔·富耶与让·马利·居友”为题，报告中江兆民逻辑思维背后的汉学素养。接下来，由来自本校的武田祐树(日本汉学研究中心研究协力员、本校文学部非常勤讲师)以“川田甕江的欧美视野：着眼于甕江文库所藏资料”为题，以从前作为汉学者而闻名的川田甕江对欧美的关注与理解，提出了关于其与重野成斋之间矛盾的新见解。最后，由本校东亚学术综合研究所前客座研究员的艾迪·杜弗隆老师(波尔多·蒙田大学副教授、立教大学招聘研究员)发表了主题报告“论法国民权系官僚河津佑之：《修身原论》与阿道夫·弗兰克、关于道德要素 *Éléments de morale*”。该报告聚焦于明治前期的官僚、曾任东京法学校校长的河津佑之，不仅介绍了其生平事迹，还考察了近代日本与法国共和主义的交汇点，并提及了他在与法国共和主义的关联中所发挥的作用。

Eléments de morale について」が行われた。これは、明治前期の官僚で東京法学校の校長であった河津祐之を取り上げた報告であり、事績の紹介及び近代日本とフランス共和主義との接点を考察する上で、彼がフランス共和主義との関わりにおいて果たした役割にまで言及するものであった。

最後に、本シンポジウムの所感を述べる。本シンポジウムは、法学部と文学部の研究者が名を連ねる領域横断的な側面を備えた集まりであり、社会科学と人文科学との共同研究が有意義であることを改めて確認できる場であると共に、学術研究において、研究対象に近づけば近づくほど、分野ごとの細かい相違など些末なものであると実感するようになる、ということを再認識できる場であった。これは時代を越えた問題であって、漢学者の洋学知識、洋学者の漢学知識を領域横断的に検証することが有意義であると、本シンポジウムに参加し、強く感じた。

最后，我想谈谈对本次研讨会的感受。本次研讨会是一个汇聚了法学部和文学部研究者的跨领域盛会，它不仅是一个让我们再次确认社会科学与人文科学合作研究意义非凡的情况，也是一个让我们重新认识到，越是接近研究对象，就越能切实感受到各领域间细微差异等琐碎之处的地方。这是一个跨越时代的问题，参加本次研讨会，我深切感受到，跨领域检验汉学家的西方学识和西方学者的汉学知识具有重要意义。



本研究会主催者の
立教大学法学部
松田 宏一郎 教授



河津祐之に関する報告を行った
エディ・デュフルモン ボルドー・
モンテーニュ大学准教授



本研究会を共同主催し、
討論会に参加した町 泉寿郎
日本漢学研究センター長
(本学文学部教授)



川田夔江に関する
報告を行った武田 祐樹
日本漢学研究センター研究協力員
(本学文学部非常勤講師)

〔学術会議参加報告〕 Report on Academic Conference

日本中国学会第七十七回大会参加記

On Attending the 77th Annual Conference of the Sinological Society of Japan

二松学舎大学大学院文学研究科中国学専攻博士後期課程（日本漢学研究センター助手）
Sinology Major in Doctoral Course, Graduate School of Literature,
Nishōgakusha University (Assistant at Research Center for
Kanbun Studies)

大森 幹太
Ōmori Kanta

令和7年10月12日（日）・13日（月）、九州大学伊都キャンパスにて日本中国学会第77回大会が開催された。

本学・二松学舎からは、同学会副理事長である牧角悦子教授、幹事をつとめる山路裕非常勤講師、各学会研究発表の司会担当者として田中正樹及び町泉寿郎両教授、東洋文庫研究員の清水信子非常勤講師、大学院博士後期課程の佐々木正清氏、そして研究発表を予定していた筆者・大森が、それぞれの立場あるいは役割のもと参加した。

本大会では、歴代最多となる72名もの研究発表が各学会で行われた。また、中国近現代の〈越境的知識人〉許地山を主題とした次世代シンポジウム、日本大学の神谷まり子氏及び重慶大学の石運氏の各著書をそれぞれ対象とする書評シンポジウム等が実施された。企画展示「九州大学100年の中国学研究」では、数多くの貴重資料が公開され、九州大学における中国学研究的の重厚な伝統を全身で体感することができた。

筆者は大会初日、哲学・思想部会のB会場にて、「胡瑗教育活動の思想的展開——「明体適用」の発言者・劉彝を例として——」と題して発表した。発表内容は、北宋を代表する教育者として知られる士大夫・胡瑗（993～1059）の学問及び教育の成果が、同時代以降の士大夫思潮にどのように受け継がれていったかを、その高弟・劉彝（慶暦6（1046）年の進士。元祐（1086～）初年に70歳で歿。）を取り上げて考察したものである。

幸いなことに、フロアの先生方からは様々なご質問・ご意見を頂戴することができた。司会をご担当いただいた吾妻重二先生からは、北宋思想史研究において有名とはいえない劉彝なる士大夫を取り上げる意義について、発表準備段階から度々ご示教賜った。今後、着実に論考へと結実させられるよう検討を進めていきたい。

2025年10月12日和13日、日本中国学会第77回大会が九州大学伊都校区で開かれた。

来自本校二松学舎の有日本中国学会副会長牧角悦子教授、担任学会幹事の山路裕非常勤講師、各分会担任研究発表主持人的田中正樹教授和町泉寿郎教授、東洋文庫研究員清水信子非常勤講師、研究生院博士后期課程的佐佐木正清，以及计划进行研究发表的笔者大森，他们分别根据自己的所担任职责参加了这次学会。

本次大会中，各分会会场共进行了72场研究发表，创历史新高。此外，还举办了以中国近现代“跨界知识分子”许地山为主题的下一代专题研讨会，以及分别以日本大学神谷まり子和重庆大学石运的著作作为对象的书评研讨会等。在展览“九州大学100年的中国学研究”中，众多珍贵资料得以公开，让人全方位感受到九州大学中国学研究的深厚传统。

笔者在大会首日于哲学・思想分会会场B会场发表了题为“胡瑗教育活动的思想史展开——以‘明体适用’的倡导者刘彝为例”的论文。论文内容是通过其高足刘彝（庆历六年（1046）进士，元祐初年（1086）去世时享年70岁）为例，考察北宋著名教育家士大夫胡瑗（993～1059）的学问及教育成果是如何在同时代及之后的士大夫思潮中传承下来的。

幸运的是，我从与会的各位老师那里获得了各种各样的问题和意见。担任主持的吾妻重二老师从发表准备阶段起就多次就北宋思想史研究中不甚有名的士大夫刘彝的研究意义给予我指导。今后，我想继续推进研究，使其切实地结出论文研究的果实。

在大会第二天，如前所述，举行了石运所著《十七・十八世纪的日本儒学与明清考证学》（ペリかん社，2023）的书评研讨会，笔者也参加了此次会议。在全体讨论时，有意见指出，有必要结合日中两国社会的实际情况，来探讨该书主题明清考据学与日本儒学的“共时性”展开。此外，还有来自各个领域的专家提出质疑和评论，进行了多角度且活跃的讨论。

大会2日目には、先述のとおり石運氏著『十七・十八世紀の日本儒学と明清考証学』（ペリカン社2023）の書評シンポジウムが行われ、筆者もこれに出席した。全体討論の際には、該書のテーマである明清考証学と日本儒学との「共時的」展開について、日中両社会の実態や事情に即して検討する必要性を示唆する意見が呈された。他にも幅広い分野の専門家から質疑や論評がなされ、多角的かつ活発な議論が交わされていた。

ところで、来る5月23日（土）、早稲田大学にて日本儒学会2026年度大会が開催される。この大会において、本研究センター長・町泉寿郎教授の企画によるシンポジウム「日本考証学派の射程——大田錦城とその学統」を実施する予定である。石運氏の提唱した明清考証学と近世日本儒学との「共時」性は、東アジア世界が相対視され近代化へと向かう「十九世紀」においてどのように展開していったのか。筆者もパネリストの一人として考察を深める機会としたい。

另外，将于5月23日在早稻田大学举办日本儒学会2026年度大会。本次大会计划举办由本研究中心主任町泉寿郎教授策划的专题研讨会“日本考证学派的射程——大田锦城及其学统”。石运所提倡的明清考证学与近代日本儒学的“共时”特性，在东亚世界相互对视并迈向近代化的“十九世纪”是如何展开的呢？笔者也希望能作为小组讨论成员之一，借此机会进行深入探讨。



九州大学中央図書館
(写真提供者：山路裕)

2025年度寄贈資料三題

Three Materials Donated in Fiscal 2025

日本漢学研究センター長・二松学舎大学文学部教授
Director of Research Center for Kanbun Studies &
Professor in Faculty of Literature

町 泉寿郎
Machi Senjurō

本誌前号に、宝塚在住の三島信氏から寄贈を受けた、三島中洲生家である西三島家の家伝資料について紹介した。この他にも、今年度、東アジア学術総合研究所において数々の資料の寄贈を受けた。ここにその概要を記して深甚なる謝意を表するとともに、今後の研究活動に活用してご厚志に報いたいと考えている。

1：三島家（三島中洲生家）の家伝資料の寄贈・続

2025年12月に三島信氏の実弟である芦屋在住の三島祐氏から資料寄贈のお申し出を受けた。早速、研究所において整理作業に着手したが、内容は前回紹介した西三島家の家伝資料のツレと見られるものであり、前回の分より量は少ないものの、同様に貴重な資料群である。概要は以下の通りである。

- ・文書（約50点）：山田方谷の師である丸川松隠の書簡2点、西阿知村の儒者鷓鴣大治（号春斎）の書簡4点、山田方谷の書簡1点、三島中洲の書簡7点、三島席次郎の書簡10点、藤戸村の庄屋日笠武一郎の書簡2点、その弟日笠竹次郎の書簡2点、荻野幸平の書簡2点などがある。
- ・書画（18点）：三島中洲の書5点、山田準の書4点、「三島中洲生誕地碑」「先妣小野氏墓碣銘」「生齒碑銘」「節士三島時政墓（碑銘）」の拓本などがある。
- ・器物（7点）：貞明皇后より葉山御用邸の土産として賜った石製の十二支玩具などがある。
- ・書籍（12点）

2：神戸秋山家資料

6月には愛知県在住の神戸祥氏から、資料寄贈のお申し出を受けた。備中松山藩士の神戸秋山（1823～1879）は、山田方谷からその理財の才を認められた人物で、方谷の次の世代の政治家として重要な存在であった。概要は以下の通りである。

- ・文書（約50点）：山田方谷の書簡32点、三島中洲の書簡3点、由緒書等。特に方谷書簡は『魚水実録』未収録が多く、内容的にも貴重である。

在本刊前一期中、我们介绍了由居住在宝塚的三岛信先生捐赠的、三岛中洲出生地西三岛家的家传资料。除此之外，本年度东亚学术综合研究所还收到了诸多资料捐赠。在此，特此概述并深表感谢，我们计划将在今后的研究活动中加以利用，以报答各位的厚爱。

1：三島家（三島中洲出生地）家伝資料の寄贈・続

2025年12月、我们收到了居住在芦屋的三岛信氏亲弟弟三岛祐氏捐赠资料。我们立即着手在研究所进行整理工作，内容是之前介绍过的西三岛家家传资料相关的补充资料，虽然数量比上次少，但同样是一批珍贵的资料。概要如下。

- ・文书（约50件）：包括山田方谷的老师丸川松隠的书简2件、西阿知村儒者鷓鴣大治（号春斎）的书信4件、山田方谷的书信1件、三岛中洲的书信7件、三岛席次郎的书信10件、藤戸村庄屋日笠武一郎的书信2件、其弟日笠竹次郎的书信2件、荻野幸平的书信2件等。
- ・书画（18件）：包括三岛中洲的书法作品5件、山田准的书法作品4件，以及“三岛中洲诞生地碑”、“先妣小野氏墓碣铭”、“生齿碑铭”、“节士三岛时政墓（碑铭）”的拓片等。
- ・器物（7件）：有贞明皇后赐予作为叶山御用邸的纪念品石制十二生肖玩具等。
- ・书籍（12本）

2：神戸秋山家資料

6月、收到了居住在爱知县的神戸祥先生寄赠资料。备中松山藩士の神戸秋山（1823～1879）是山田方谷认可其理财才能的人，是方谷下一代的重要的理财家。概要如下。

- ・文书（约50件）：山田方谷的书信32件、三岛中洲的书信3件、家谱等。特别是方谷的书信，其中许多未收录于《鱼水实录》，内容极为珍贵。
- ・书画（约20件）：山田方谷的书法作品5件、川田甕江的书法作品2件、三岛中洲的书法作品2件等。

・書画（約 20 点）：山田方谷の書 5 点、川田甕江の書 2 点、三島中洲の書 2 点など。

3：佐藤保先生の旧蔵書類

3月30日に逝去された佐藤保先生（90歳）は、本学の理事長や顧問を務められ、また本研究所にとっては21世紀COEプログラム時代（2004～2008年度）に研究体制全般にわたってリーダーシップを発揮された恩人であり、本誌「雙松通訊」の名付け親でもある。本研究所に縁の深い資料として、ご遺族から以下の書籍と書画類約20点のご寄贈を受けた。

- ・『養浩堂続集』巻一 宮島詠士撰 写本
- ・『養浩堂詩鈔』二卷 宮島詠士撰 昭和15年善隣書院排印本
- ・『人境廬詩草』十一卷 黄遵憲撰 宣統3年五弟遵楷跋排印本
- ・『人境廬詩草箋注』十一卷、年譜一卷、詩話二卷 黄遵憲撰・錢萼孫箋注 1936年排印本
- ・『日本雜事詩』二卷 黄遵憲撰 飯島有年訓点 明治13年早乙女要作排印本 一冊
- ・『日本雜事詩』二卷 黄遵憲撰 光緒5年天南遜窟排印本 一冊

3：佐藤保先生の旧蔵書類

3月30日去世の佐藤保先生（90歳）曾担任本校の理事長和顾问，并且对于本研究所来说，他是在21世纪COE项目期间（2004～2008年度）对整个研究体系发挥了领导作用的恩人，同时也是本刊《双松通讯》的命名者。作为与本研究所渊源深厚的资料，我们收到了其遗属捐赠的以下书籍和书画类作品约20件。

- 《养浩堂续集》卷一 宫岛咏士撰 写本
- 《养浩堂诗钞》二卷 宫岛咏士撰 昭和15年善邻书院排印本
- 《人境庐诗草》十一卷 黄遵宪撰 宣统三年五弟遵楷跋排印本
- 《人境庐诗草笺注》十一卷、年谱一卷、诗话二卷，黄遵宪撰、钱萼孙笺注 1936年排印本
- 《日本杂事诗》二卷 黄遵宪撰 饭岛有年训点 明治13年早乙女要作排印本 一册
- 《日本杂事诗》二卷 黄遵宪撰 光绪5年天南逊窟排印本 一册

漢籍整理実習講座への参加報告

Report on Attending a Practical Course on Organizing Chinese Books

二松学舎大学大学院文学研究科中国学専攻博士後期課程
Sinology Major in Doctoral Course, Graduate School of Literature,
Nishōgakusha University

山形 悠
Yamagata Yū

2025年8月20日(水)～8月20日(金)の3日間、二松学舎大学九段キャンパス4号館4071教室および公益財団法人東洋文庫において、漢籍整理実習講座が開催された。以下に、その概要を報告する。

講座の目的は、文学研究科(中国学専攻および国文学専攻)の大学院生を対象として、専門家を講師として招いて、漢籍・和本等の古典籍を分類・整理するための知識や、技術を教授するものである。

第1日目(8月20日(水))は、清水信子講師(公益財団法人東洋文庫図書部主幹研究員、本学文学部国際日本・中国学科非常勤講師)による「漢籍入門」、吉丸雄哉講師(二松学舎大学文学部国文学科教授)による「和本入門」、友部和弘講師(元筑波大学非常勤講師)による「線装本装丁実習」が開講された。

第2日目(8月21日(木))は、町泉寿郎講師(二松学舎大学文学部国際日本・中国学科教授)による「書画・文書講義」、岸剛史講師((株)カロワークス)による「資料撮影実習」が開講された。

第3日目(8月22日(金))は、清水信子講師による「東洋文庫書庫見学」および「漢籍・古典籍整理実習」が開講された。

各科目ごとに、講師の専門性を踏まえた講義や実物資料を用いた解説等が行われた。実施時間は、それぞれ大学講義の1限分に相当する90分とし、実習を伴う場合には2～3限分に相当する時間で行われた。

申し込み人数および内訳は、文学研究科博士前期課程7名、文学研究科博士後期課程5名、文学研究科科目等履修生1名の合計13名であった。

事後アンケート結果(13件)によれば、実施時期については「今回と同じ時期でよい」が多数(10件)を占めた。実施日数については全回答者が「3日間」と回答しており、開催時期と日程設定は適切であった。また、実施間隔についても「連日開催」を支持する意見が大半(12件)を占め、1日あたりの講座数についても全員が「今のまま(3講座)でよい」と回答していることから、長期休業期間を利用した集

2025年8月20日(周三)至8月22日(周五)三天期間、于二松学舎大学九段校区4号楼4071教室及公益財団法人東洋文庫举办了汉籍整理实习讲座。以下报告讲座的概要。

本次讲座旨在面向文学研究科(中国学专业及国文学专业)的研究生,邀请专家作为讲师,教授有关汉籍、和本等古典书籍的分类和整理的知识与技术。

首日8月20日(周三),首日开设了,包括由清水信子讲师(公益財団法人東洋文庫图书部主幹研究員、本校文学部国際日本・中国学科非常勤講師)讲授的“汉籍入门”课程、吉丸雄哉讲师(二松学舎大学文学部国文学科教授)讲授的“和本入门”课程以及友部和弘讲师(前筑波大学非常勤講師)讲授的“线装本装帧实习”课程。

第二天(8月21日(周四))开设了由町泉寿郎讲师(二松学舎大学文学部国際日本・中国学科教授)讲授的“书画・文书讲座”课程以及由岸刚史讲师((株)Caro Works)讲授的“资料拍摄实习”课程。

第三天(8月22日(周五)),开设清水信子讲师讲授的“东洋文库书库参观”和“汉籍・古典籍整理实习”课程。

针对各科目,分别进行了基于讲师专业知识的授课以及使用实物资料的讲解等。实施时间为相当于大学课程一节课的90分钟,若包含实习操作的课程,则为相当于两到三节课的时间。

报名人数及构成情况为:文学研究科硕士课程7名、文学研究科博士课程5名、文学研究科科目旁听生1名,共计13名。

根据事后问卷调查结果(13份),关于实施时间,“与本次相同的时间段即可”的意见占多数(10份)。关于实施天数,所有受访者均回答“3天即可”,因此举办时间和日程安排较为合适。此外,关于实施间隔,支持“连续开设”的意见占大多数(12份),关于每天的讲座数量,所有受访者均回答“目前的数量(3场)即可”,由此可见,利用长期休假期间进行集中授课的实施方式也是恰当的。在内容方面,“东洋文库书库参观”、“书画・

鹿沼まるごと博物館第十回企画展関連講座実施報告

Report on Lecture Course Held in Conjunction with the 10th Thematic Exhibition at Kanuma Museum

二松学舎大学大学院文学研究科中国学専攻博士後期課程（日本漢学研究センター助手）
Sinology Major in Doctoral Course, Graduate School of Literature,
Nishōgakusha University (Assistant at Research Center for
Kanbun Studies)

大森 幹太
Ōmori Kanta

令和6年12月15日、栃木県の鹿沼市文化活動交流館にて、鹿沼まるごと博物館第10回企画展「Re-Create」関連講座「鈴木石橋の学芸と学縁——『周易象義』『石橋文集』『石橋詩稿』概観——」を行った。

鹿沼まるごと博物館とは、市域全体を博物館として捉え、地域の教育・文化の向上に活用することを目的とする市の行政事業である。その主要行事として、地元の歴史にまつわる貴重史料を一般公開する企画展が毎年度開催されている。第10回企画展では過去9回の成果について「再構築（Re-Create）」の試みのもと、これまでの各企画展に関連する新史料が数多く展示された。

鹿沼市を郷里とする筆者は、第1回企画展「鈴木石橋と麗澤之舎——鹿沼の知と文化の潮流——」（平成27年度）に関する「再構築」の成果報告分担者として上述のとおり登壇した次第である。

そこで本講座では、鹿沼に生きた鈴木石橋（1754～1815）なる儒学者の学術交流の様子や経学的立場について調査した結果を発表した。

まず、第1回企画展の概要を振り返り、本講座の前提と目的について述べた。すなわち、鈴木石橋をめぐる従来の研究は、日本地域史研究の観点から、救恤活動や教育活動に貢献した篤志家としての側面を中心に検討がなされてきた。一方で、石橋が書き残した漢文資料、とりわけ儒学文献に関わる著作はほとんど顧みられていない。こうした現状を踏まえ、石橋の学問及び周辺の学術ネットワークについて、日本漢学史上に位置づける検討を行う必要があると提起した。ついで、『石橋文集』・『石橋詩稿』・尺牘資料の各構成を概観した。これにより、石橋が中根東里の学塾継承者である佐野の須藤氏と姻戚関係にあったこと、市河寛齋・平澤旭山・松川東山・鈴木武助・大田錦城といった同時代の有力な学者たちと広く交遊を有していたこと、門人である蒲生君平（1768～1813）とは死

2024年12月15日、在栃木県鹿沼市文化活動交流館、举办了“鹿沼整体博物館”第10回企画展“Re-Create”相关讲座“铃木石橋の学芸と学縁——『周易象義』『石橋文集』『石橋詩稿』概観——”。

所谓“鹿沼整体博物館”，是指鹿沼市将整个城市范围视为一座博物館，以此促进地区教育与文化提升的市政项目。作为其主要活动，每年度都会举办公开展示与当地历史相关的珍贵史料企画展。第10回企画展是以对过去9次成果尝试“再构建（Re-Create）”，展示了大量与以往各次企画展相关的新史料。

笔者の故乡是鹿沼市，作为第1回企画展“鈴木石橋と麗澤之舎——鹿沼の知識と文化の潮流——”（2015年度）“再构建”成果報告の参与者，如上所述登台发言。

本次講座公布了有关在鹿沼出生的儒学者鈴木石橋（1754～1815）的学术交流情况及经学立場的调查结果。

首先，回顾了第1回企画展の概要，并说明了本講座的前提与目的。也就是说，以往围绕鈴木石橋的研究，大多从日本地域史研究的视角出发，主要考察其作为对救济活动和教育事业有所贡献的慈善家这一方面。但另一方面，石橋留下的汉文资料，尤其是与儒学文献相关的著作，几乎未受到关注。基于这一现状，有必要从日本汉学史上，对石橋的学问及其周边的学术网络加以定义。接着，概述了『石橋文集』『石橋詩稿』以及尺牘資料的各自构成。由此确认：石橋与中根東里の学塾継承者佐野須藤氏之间存在姻戚关系，石橋与市河寛齋、平澤旭山、松川東山、鈴木武助、大田錦城等同时代的重要学者广泛交往，并且与其門人蒲生君平（1768—1813）之间直至死別一直保持着亲密的师生关系。随后，解读了石橋所作但未收入实际刊行本《九经谈》中的《九经谈序》草稿，并考察了其在序文中寄托的经学问题意识。并在此基础上，公布了石橋晚年著作《周易象義》全二十卷中所引用文献の目录，由此说明石橋广泛引用汉、宋、明、清乃至江戸时期的《周易》注释，对各种

別に至るまで親密な師弟関係にあり続けたことを確認した。そして、実際に刊行された『九経談』には載っていない石橋による『『九経談』序』の草稿を読解し、この序文に託して述べる経学への問題意識について考察した。以上の報告を踏まえ、石橋晩年の著『周易象義』全二十巻中における引用文献の一覧を公表した。そのうえで、石橋が漢・宋・明・清、さらに江戸の『周易』注釈を広く引用し、その解釈の是非を一々断じる折衷の立場によって経書を解釈したという傾向を説明した。

筆者の不手際により予定された講座時間を大幅に超過してしまったにも拘わらず、ご参加の方々には時間の許す限り熱心に聴講していただき、感謝の気持ちでいっぱいである。

最後に、激務を厭わず駆けつけていただいた松井正一市長、このような機会を与えていただいた教育委員会事務局文化課の皆様深く感謝し、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

解釋逐一加以裁断，以折衷立场来阐释经典这一倾向。

尽管由于笔者准备不周，导致讲座时间大幅超出预定，但到场的各位仍在时间允许范围内认真聆听，笔者深表感谢。

最后，向不辞繁忙亲临现场的松井正一市长，以及给予我此次机会的教育委员会事務局文化課的各位致以衷心感谢，并在此谨致以诚挚的谢意。



鹿沼まると博物館第10回企画展「Re-Create」

関連講座「鈴木石橋の学芸と学縁—『周易象義』『石橋文集』『石橋詩稿』概観—」

日時：令和6年12月15日（日）13時30分～15時 会場：鹿沼市文化活動交流館 講師：大森幹太

寄贈資料一覧 (受入：2025年4月～2026年3月)

■目録

書名	発行所 (発行年)
京都古書組合総合目録	京都府古書籍商業協同組合 (2025)
永森書店図書目録	永森書店 (2025)
明德出版社図書目録	明德出版社 (2025)
『大垣市史 通史編 近現代』 収集写真目録 (6)	大垣市立図書館 (2025.3)
郷土資料目録 家分文書 (早野家文書2) 第44集	大垣市立図書館 (2025.3)
琳琅閣古書目録	琳琅閣書店 (2025.8)
古典籍展観大入札会目録	東京古典会 (2025.11)

■紀要

書名	発行所 (発行年)
漢字学研究第12号	立命館大学白川静記念東洋文学文化研究所 (2024.12)
漢字学研究第13号	立命館大学白川静記念東洋文学文化研究所 (2025.12)
北九州市立大学地域戦略研究所 年報 第5号	北九州市立大学地域戦略研究所 (2025.3)
中國思想研究史 第46号	京都大學中國哲學史研究會 (2025.3)
高知県立高知城歴史博物館 研究紀要 第7号	高知県立高知城歴史博物館 (2025.3)
校史・学術資産研究 第17号	国学院大学校史・学術資産研究センター (2025.3)
校史・学術資産研究 第18号	国学院大学校史・学術資産研究センター (2026.3)
石橋湛山研究 第7号	立正大学石橋湛山研究センター (2025.3)
漢學研究通訊 第173号	漢學研究中心 (中華民国) (2025.2)
漢學研究通訊 第174号	漢學研究中心 (中華民国) (2025.5)
漢學研究通訊 第175号	漢學研究中心 (中華民国) (2025.8)
漢學研究通訊 第176号	漢學研究中心 (中華民国) (2025.11)
漢學研究通訊 第177号	漢學研究中心 (中華民国) (2026.2)
漢學研究 第120号	漢學研究中心 (中華民国) (2025.3)
漢學研究 第121号	漢學研究中心 (中華民国) (2025.6)
漢學研究 第122号	漢學研究中心 (中華民国) (2025.9)
漢學研究 第123号	漢學研究中心 (中華民国) (2025.12)
東洋文化研究 第27号	学習院大学東洋文化研究所 (2025.3)
調査研究報告 漢代石刻姓氏史料集成 第77号	学習院大学東洋文化研究所 (2025.9)
調査研究報告 戦時期の学習院 旧制高等科の記録と記憶 第78号	学習院大学東洋文化研究所 (2025.9)
東洋思想文化 第12号 (東洋大学文学部紀要 第78集)	東洋大学文学部 (2025.3)
東洋学研究 第63号	東洋大学東洋学研究所 (2026.3)
アジア文化研究史 第25号	東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻 (2025.7)
人文研紀要 第110号	中央大学人文科学研究所 (2025.9)

人文研紀要 第111号	中央大学人文科学研究所 (2025.9)
人文研紀要 第112号	中央大学人文科学研究所 (2025.9)
十六世紀における旧約聖書「詩篇」解釈・翻訳と寛容の問題	中央大学人文科学研究所 (2026.1)
泊園 第64号	泊園記念会 (2025.7)
文化交渉 東アジア文化研究科院生論集 第15号	関西大学大学院東アジア文化研究科 (2026.2)
米澤國語國文 第54号	山形県立米沢女子短期大学国語国文学会 (2026.2)
鶴見大学仏教文化研究所紀要 第31号	鶴見大学仏教文化研究所 (2026.3)

■図録

書名	発行所 (発行年)
八代藩主 黒田長舒	朝倉市秋月博物館 (2025.10)

■お知らせ・レター・会報

書名	発行所 (発行年)
東方学会報 No.128	東方学会 (2025.7)
東方学会報 No.129	東方学会 (2025.12)
多度津文化財保存会報 第27号	多度津文化財保存会 (2025.8)
慶應義塾大学東アジア研究所 ニュースレター No.39	慶應義塾大学東アジア学術総合研究所 (2026.2)

■一般図書

書名	発行所 (発行年)
塩田地主野崎家 地方資産家の活動と日本の近代化・帝国化	京都大学学術出版会 (2025.12)

2025年度 二松学舎大学 日本漢学研究センター主催公開講座

2025年度日本漢学研究センターが主催する公開講座は、日本漢学研究又は漢文文献の調査・整理に関心を持つ若手研究者を育成する講座です。受講対象者は、学内外の大学院生及び院生レベルの若者を主とし、他に一般社会人等にも、演習・講義等を通じて必要な基礎知識と技能を身につけていただくことを目的としています。

◆受講料：無料 ◆対象者：学生、研究者、教員、図書館員及び一般の方 ◆会場：本学九段校舎

講座名	内容	講師	所属	曜日・時限	受講者数(名)
演習講座	1 古文書 解読講座	町 泉寿郎	本学文学部 教授	火曜日 4時限	3
	2 序文 解読講座	王 宝平	本学文学部 教授	水曜日 6時限	1

《各講座》 前期： 4/8～7/26 後期： 9/20～1/26

諸会議等報告 (2025年4月～2026年3月)

●日本漢学研究センター運営連絡会

回	開催日	主な議題（協議事項・報告事項等）①	主な議題（協議事項・報告事項等）②
第1回	2025.4.9	構成員について	事業概要について
第2回	2025.5.1	広州・暨南大学との協定締結、および広東省梅州市での資料調査（黄遵憲記念館及び何如璋旧居の見学）について	
第3回	2025.7.1	佐藤 保 顧問御遺族からの貴重資料寄贈の受け入れについて	
第4回	2025.10.1	2026（令和）8年度特別事業予算申請について	立教大学との共催研究会の開催について
第5回	2025.11.18	日本漢学研究センター特別講演会の開催について	
第6回	2025.12.8	『日本漢文学研究』第21号の査読結果について	
第7回	2026.3.11	助手の選考について	漢学関係資料の購入について

●研究会

開催日	名称	テーマ	会場
2025.12.6	日本漢学研究センターと立教大学との共催研究会	フランス共和主義と明治漢学の邂逅	立教大学 12号館第3会議室

●講演会

開催日	講師	演題	会場
2026.2.7	上村 和史 (岡山県高梁市教育委員会)	山田方谷と幕末維新期の備中松山藩政	二松学舎大学 1号館401教室
	町 泉寿郎(二松学舎大学)	新収資料からみる三島中洲研究の現状	

●研究協力

大学・機関名	プロジェクト名
山東大学	「全球漢籍合璧工程」
国文学研究資料館	データ駆動による課題解決型人文学の創成におけるデータベース構築

●刊行物

書誌名	責任編集者	発行年月日
『自由民権運動期におけるヨーロッパ思想と儒学－接触、交流、翻訳－』	町泉寿郎、エディ・デュフルモン	2025.3.25
『三島中洲研究』Vol.8	日本漢学研究センター	2025.3.31
『日本漢文学研究』第21号	日本漢文学研究編集委員会	2025.3.31
『雙松通訊』Vol.32	日本漢学研究センター	2025.3.31

Editor's note

編集後記

●『雙松通訊』32号をお届けします。学内外での講演会の実施報告、学会参加記、漢籍整理講習会の参加報告などの記事から、日本漢学研究センターが学内外とも連携しつつ地道な活動を継続していることをご理解いただけるのではないかと思います。

研究活動の成果物としては、2024年12月7日に開催したシンポジウム「ヨーロッパの政治思想と自由民権運動時期の日本、漢学」の内容を『(日本漢学研究叢刊5)自由民権運動期におけるヨーロッパ思想と儒学—接触、交流、翻訳—』として汲古書院から刊行することができました。ぜひ一人でも多くの方に手に取っていただきたいと思います。また、長らく刊行できていなかった『三島中洲研究』Vol.8を発行しました。

また、本誌前号には西三島家資料の寄贈、今号には西三島家のご分家と神戸家、および故佐藤保先生の資料の寄贈についての記事を掲載しましたが、実はその後もう一件の資料寄贈のご相談を受けました。弊研究所の活動が浸透してきたことの証として、心よりありがたく感じています。来年度はこれら新資料をも含めて、本学所蔵の筆談資料の展示を行う予定です(2026/7/27~10/17、於大学資料展示室)。その他、新たに購入した資料の中にも、戦後の二松学舎に関する重要な資料があります。さまざまな機会を通して、広く紹介・公開していきたいと考えています。

引き続き関係各位のご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。
(S.M.)



『師古』
中洲先生印譜



発行日 —— 2026年3月31日

編集・発行 —— 二松学舎大学東アジア学術総合研究所
日本漢学研究センター実施委員会

〒102-0074 東京都千代田区九段南2-4-14
TEL. 03-3261-3535 FAX. 03-3261-3536
e-mail:kangaku@nishogakusha-u.ac.jp

<https://www.nishogakusha-u.ac.jp/eastasia/>